

# シロ・ヘクサブラとヘクサブラ研究

—— ヘクサブラ研究 2 ——

伊 藤 利 行

## 序

オリゲネス Origenes (ca. 185-253/4) のギリシア語旧約聖書本文に関する偉大な業績であるヘクサブラ Hexapla (τὰ ἑξαπλά 六部共観) の第5欄 [オリゲネス校訂セプトゥアギンタ本文] のシリア語訳であるシロ・ヘクサブラ Syrohexapla は、ギリシア語本文に忠実な翻訳スタイル、本文批評の為にオリゲネスが加えたアリストタルコスの記号の忠実な再現、そしてヘクサブラ第5欄以外の他のギリシア語訳 (アキュラス Akulas 訳・シュンマコス Symmachos 訳・テオドティオン Theodotion 訳等) のシリア語訳をも欄外注の形でしばしば持つ事によって有名である。

本稿は、先に発表した拙論、「ヘクサブラ断片の残存率について——ヘクサブラ研究1——」(京都大学基督教学会編『基督教学研究』第4号 [1981] 所収) と「ギリシア語聖書の研究への構想」(筑波大学哲学・思想学系編『哲学・思想論集』第8号 [1982] 所収) の補説としてシロ・ヘクサブラについて叙述しようとするものである。本稿では、第1節でこのシロ・ヘクサブラの成立について、第2節でその伝承と刊本について、そして第3節でその特徴とヘクサブラ研究にとってのその意義を論じる。

## 第1節 シロ・ヘクサブラの成立

シリア人で単性論派の主教・著作家であったグレゴリウス・バル・ヘブライオス Gregorius Bar Hebraeus (1225/26—1286) は、教父達の様々な聖書注解からの豊富な引用によって有名な彼の著作 *Horreum Mysteriorum* 『奥義の倉』の序文の中で次のように記している。

「そして私はギリシア人達の、即ち七十二人の (τῶν LXXII) 訳 (ܡܬܬܬܝܠܐ) からこれ [=ベシッタ] の確証の為に数多くのものを付け加えた。更に、アキュラス、シュンマコス、テオドティオンの訳、第五訳 (Quinta), 第六訳 (Sexta) を、確証の為ではないが、説明の為に使用した。…さて、七十人訳旧約聖書をテラ・マウゼラトの (ܬܪܐ ܡܘܙܝܪܐ) 主教パウルス Paulus はギリシア語からシリア語へ翻訳した」<sup>(1)</sup>。

バル・ヘブライオスよりも古い時代の著作家モーセス・バル・ケパス Moses Bar Cephas (ca. 815-903) も *Commentarii in Hexaëmeron* 『六日間注解』の中で、エデッサのヤコブ Jakob von Edessa (ca. 640-708) を典拠として、テラのパウルスをセプトッアギンタのシリア語訳者として報告している<sup>(2)</sup>。

様々な写本の奥付からもパウルスという名前を読み取る事ができる。その際にそのパウルスが他ならぬテラのパウルスである事、そのみか更に詳細な成立にまつわる情報をも入手することができる。

パリの国立図書館所蔵のシロ・ヘクサブラ訳列王紀下の写本 Syr. 27 はその代表的なものである。それによると、主教パウルスは総主教アタナシウス Athanasius の命名と勧めにより彼らがアレクサンドリアに滞在中に七十二人の訳をギリシア語からシリア語に翻訳した。その年はギリシア暦の 928 年 (A. D. 616-7 年) で、パウルスと共に訳業に努力した人々の中にトマス Thomas という人物がいた事などがわかる<sup>(3)</sup>。

大英博物館のシリア教父のカテナ写本である Add. 12168 は、同様にパウルスの名前、アレクサンドリアという地名、ギリシア暦の 928 年を書き記している<sup>(4)</sup>。

更に、同じく大英博物館の列王記上の写本 14437 には、ギリシア暦 927 年という年代と前述の二写本よりも詳細な場所名が記されている。即ち「アレクサンドリアのエナトン Enaton [ܐܢܬܢ] あるいはアントン Anton」にあるアントニオス修道院で翻訳された」と<sup>(5)</sup>。

以上のような写本の奥付が語る事から次のような事を知ることができるであろう。

1) 616-7 年という奥付の示す年代から、奥付中に現れる 3 人の人物パウルス、アタナシウス、トマスは、それぞれテラのパウルス、アンテオケアのアタナシウス 1 世 Athanasius I von Antiocheia, ハーケルのトマス Thomas von Harqel であると考えられる。そこから次のような成立をめぐる事情が推定される。

595-631 年<sup>(6)</sup>、他の説では 604-644 年<sup>(7)</sup>の間、ヤコブ派の総主教であったアタナシウス 1 世は、ペルシア軍のシリア侵入により、616 年には、すでに数年前から逃亡者の生活をよぎなくされていたようである<sup>(8)</sup>。彼は、5 人の主教を伴い、アレクサンドリアの単性論派の総主教アナスタシウス・アポジガティウス Anastasius Apozygatius (†613, 12月)<sup>(9)</sup> を訪問した<sup>(10)</sup>。この 5 人の主教の内に、先のパウルスとトマスが含まれているのであり、パウルスが他ならぬテラのパウルスである事は年代的に確かであるが、では、トマスが他ならぬハーケルのトマスである事は、何によって確証できるのか。それは、シロ・ヘクサブラの場合と同様に写本の奥付である。それによると彼は、ギリシア暦 927 年 (A. D. 616) にアレクサンドリアのエナトンで二三のギリシア語

新約聖書の校合に基づいてシリア語新約聖書（フィロクセヌス Philoxenus von Mabbug の訳、507/8 年頃完成）の改訂を行った。この年代は、先のシロ・ヘクサブラの写本の奥付とも一致する上、それが行われた場所も同じである。従って、ハーケルのトマスが5人の主教の内の一人であったと考えてよいであろう。ところで、この場所としての「エナトン」とは何を意味しているのだろうか。二つの説がある。①アレクサンドリア市の区画の「第9 ἐνατον 区」の意、②距離の「第9(里程標)」の意。「エナトン」がたぶん数詞である事は、二三の傍証によって確かめられる<sup>(11)</sup>。また、②の意味では、普通あたかもその名称が修道院の名称から出たかのように、「アントン」と書かれたようである<sup>(12)</sup>。

2) 更に、この年代(616-7年)および他の写本の奥付の年代等を比較検討する時、我々は、シロ・ヘクサブラの翻訳に要した期間を推定できる。

まず、上限はいつか。写本の奥付では616-7年にはアレクサンドリアに一行は「滞在中」であり、前述のようにアナスタシウス総主教は613年の12月に死亡しているので、恐らく613年早々に一行はアレクサンドリアに到着し、ほぼ同じ頃に訳業にとりかかったのであろう。

では、下限はいつか。有名なミラノ写本(C. 313. Inf. Ambrosian Library)の奥付で一番遅い時期のものは、十二預言書とダニエル書のもので、そこでは617年1月となっている。ミラノ写本の順序で一番最後に来るものは、この二書に続いており、エゼキエル書とイザヤ書である。しかし、これらの奥付には年代は書かれていない。しかし、バル・ヘブライオスの「シリア年代記」に書かれているペルシア軍のアレクサンドリア略奪の時期<sup>(13)</sup>が正しいとすれば、これら二書は、617年の内に翻訳し終えられていなければならない。しかし、ペルシア軍のアレクサンドリア略奪を619~20年とする意見もある<sup>(14)</sup>ので、下限は、早ければ617年、遅くとも620年と考えてよい。従って、シロ・ヘクサブラは613~617年の間に成立したと考えられる。

#### 注

- (1) F. Field, *Origenis Hexaplorum quae supersunt*, 2 Bde., Oxford 1875; Nachdruck, Hildesheim 1964 中の Prolegomena in Hexapla Origenis に収められているラテン語訳による (S. lxviii).
- (2) J. Gwynn, *Paulus Tellensis*, in: W. Smith-H. Wace (hrsg.), *A Dictionary of Christian Biography*, Bd. IV, London 1887, 266-271 による。この論述は今日なおテラのパウルスについて最良のものである。我々のこの節の叙述もこれによるところ大である。
- (3) F. Field, op. cit. Prolegomena S. lxix にラテン語訳がある。
- (4) J. Gwynn, op. cit. 266.
- (5) J. Gwynn, op. cit. 267.
- (6) バル・ヘブライオス, *Chron. Eccl.* i. 50.
- (7) ディオニシウス・バル・サリービー *Dionysius Bar Šalibi* (†1171) の *Chronicon* 『年代記』。Gwynn, op. cit. 267 によるが、彼は、Assemani (イタリア語, 4人の有名な東洋学者の総称, その名前と業績は RGG<sup>3</sup>, I, 649 f. に示されている) によって、すべての著作家の引用個所を示している。以下、文献名の後の頁数は、当該文献の Assemani 版中のものである。それによれば、Dionysius の引用の

典拠は、(Joseph Simonius,) Bibliotheca Orientalis, 4 Bde, 1719-28 の第2巻 102~103 頁である。

- (8) パル・ヘブライオス, Chron. Syr., S. 98 及びテオファネス Theopanes, Chronogr., S. 250.  
 (9) セベルス Severus von Ashmunin による。Assemani, ii. S. 70, 332,  
 (10) パル・ヘブライオス, Chr. Eccl., l. l. によれば訪問の時は, 615-6 年であるが, これでは, アナスタシウス総主教は即ち死亡していた事になるので, この年代は採用できない。  
 (11) このアタナシウスら一行のエジプト訪問の約一世紀程以前に同じくアンテオケアの単性論派の総主教セベルス Severus von Antiocheia (ca. 465~538) が皇帝ユスティニアヌス1世 Justinianus I. (483~565) の単性論派迫害により総主教を罷免され (518年) アレクサンドリアに逃亡したが, その際, セベルスが居住したのは, この「第9区」であった (レオンティオス Leontios, De Sectis, Act. 5, S. 470)。セベルスについての別の話の中には「第18区」についての言及がある (アナスタシオス・シナイテス Anastasios Sinaïtes, Hodeg., Schol. in c. 22, S. 152)。更に, 「第9区」も「第18区」も修道士達の居住区であったという報告もある (ヨハネス・モスクス Johannes Moschus [ca. 550~619], Pratum Spirituale 146, 162, 176, 177, 184).  
 (12) vgl. Assemani, i. S. 41 Anm.  
 (13) Chron. Syr., S. 99.  
 (14) Michel LeQuien (1661~1733), Oriens Christianus ii, S. 450.

## 第2節 シロ・ヘクサブラの伝承と刊本<sup>(1)</sup>

このようにして成立したシロ・ヘクサブラは, 教父の著作のみならず聖句集や典礼文書の中でも用いられた。これらの伝承形態は次のように区分してよいであろう。

### I. 直接伝承 (シロ・ヘクサブラそのものの伝承)

シロ・ヘクサブラ本文の写本 ..... ①

### II. 間接伝承 (シロ・ヘクサブラを引用したものの伝承)

1) 聖句集 ..... ②

2) ペシッタ訳の欄外注等 ..... ③

3) 教父文献

α) カテナ ..... ④

β) 聖書注解等の著作中の引用 ..... ⑤

4) 「マソラ」写本末尾のマソラ ..... ⑥

III. シロ・ヘクサブラの翻訳 ..... ⑦

以下, ①~⑦ について順にみてみよう。

① シロ・ヘクサブラ本文を伝承する写本群は, その刊本との関係から便宜的に次の6つのグループに分けられる。

- ① Masius MS
- ② Milano MS
- ③ Paris MS

- ④ London MSS
- ⑤ Ceriani-„Notes“ MSS
- ⑥ Post Ceriani-editionem MSS

① この写本は、アンドレアス・マシウス Andreas Masius (1514-1573) が所有し、完本の形で公刊しなかったが、旧約聖書の五書と歴史書の部分を含んでいたようで、彼の著作<sup>(2)</sup>の中で引用した事によって知られているものである。しかし、マシウスの死後この写本は所在不明となり今日に至っている。そこで Paul de Lagarde と彼の弟子 Alfred Rahlfs は、マシウスの著作からこの写本について知り得るすべての事を集めた<sup>(3)</sup>。その結果、ラールフスは、この写本が②のミラノ写本と同時代のものであって、両写本が完全な姿で存在していたら、全旧約聖書が含まれていたに違いないという事を明らかにした。

② C. 313 Inf. ミラノ・アンブロシウス図書館所蔵。8世紀末～9世紀始。旧約聖書の知恵文学の諸書と預言書を含む（脱落少々あり）。この写本については、数多くの学者が研究し部分的な出版を行なった<sup>(4)</sup>が、A.M. Ceriani による全体の写真版の出版<sup>(5)</sup>は、画期的かつ決定的な出来事であった。

③ MS Syr. 27 パリ・国立図書館所蔵。8世紀前半。列王記下（脱落部分あり）を含む。J. G. Hasse, H. Middelndorf, P. de Lagarde らが公刊した<sup>(6)</sup>。

④ 大英博物館が1839年から1851年の間に入手した以下の写本群。

- MS Add. 14442 7世紀 創世記（脱落あり）
- MS Add. 12134 697年 出エジプト記（完全）
- MS Add. 14437a 8世紀 民数記（脱落あり）
- MS Add. 12133 8世紀 ヨシュア記（脱落あり）
- MS Add. 17103 8世紀 士師記（脱落あり）、ルツ記（脱落あり）
- MS Add. 14437b 8世紀 列王記上（脱落あり）

これらの写本から、S. Rørdam<sup>(7)</sup>, A.M. Ceriani<sup>(8)</sup>, P. de Lagarde<sup>(9)</sup> らが部分的な公刊を行なったが、1892年に P. de Lagarde は、前述の Bibliothecae Syriacae 中に ③ も ④ も一緒に収録した。

⑤ A.M. Ceriani のミラノ写本の写真版の「注」の中に出て来るものである。ミラノ写本に示される聖書の箇所を含むミラノ写本以外の写本群。大英博物館とパリ国立図書館所蔵。

<大英博物館>

- MS Add. 14434a 8世紀 詩篇（脱落あり）
- MS Add. 14434b 8世紀 詩篇（脱落あり）
- MS Add. 17257 13世紀 詩篇（脱落あり）
- MS Add. 14668a 8世紀 ホセア書（脱落あり）、ミカ書（脱落あり）

MS Add. 14668b 8世紀 エゼキエル書 (脱落あり)

MS Add. 17213 9世紀 イザヤ書 (脱落あり)

MS Orient. 8732 8世紀 イザヤ書 (脱落あり)

<パリ国立図書館>

MS Syr. 9 13世紀 詩編 (完全)

なお、②、③、④、そして⑤の大英博物館所蔵分の写本はすべて同一の場所 (Nitrian 砂漠の Dair as-Suryan) を起源としている。

⑥ A.M. Ceriani の写真版ミラノ写本によって既知の聖書の箇所を伝えるものであって、同版の刊行後に知られるようになった写本群。

Moscow, Publičnaja Biblioteka S.S.S.R. im. V.I Lenina, Gr. 432 8世紀 詩篇 (脱落あり)

刊本〔完全ファクシミリ付〕があるが、かなり不注意なもの<sup>(10)</sup>。

Baghdad, Libr. of the Chald. Patr., 1112 12世紀 (一部分15世紀) 詩篇 (脱落あり)

Baghdad, Libr. of the Chald. Patr., 211 1126年 詩篇 (脱落あり)

Rome, Vat. Libr., Borg. sir. 113 [写本のコピー (1868)。オリジナルの一葉を含む] 詩篇 (断片)

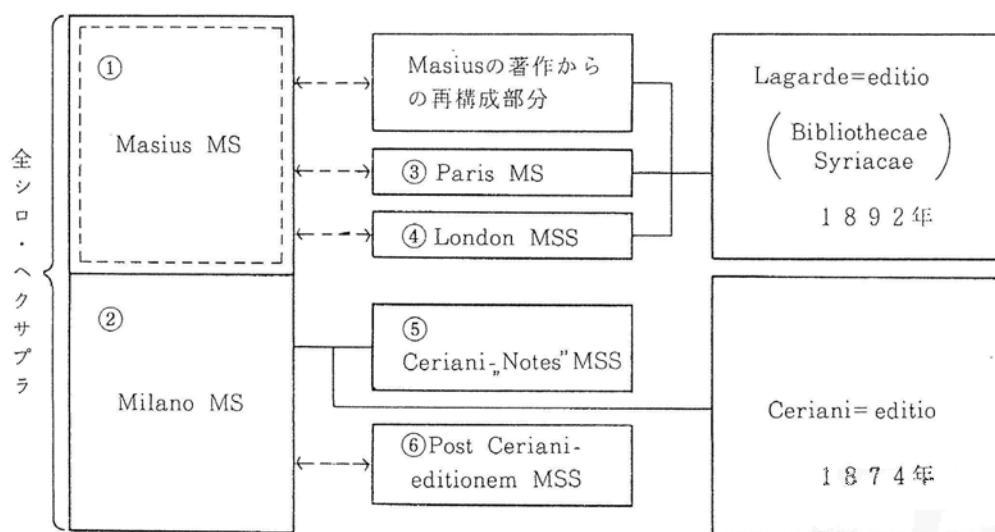
Cambridge, Univ. Libr., Orient. 929 14世紀 詩篇 (脱落あり)

Oxford, Bodleian Libr., Syr. d. 10, III° 8世紀 ヨナ書 (脱落あり), ハガイ書 (脱落あり),  
ゼカリヤ書 (脱落あり)

Cambridge (U.S.A.), Houghton Libr., Sem. Mus. Acc. n° 3952 8世紀 エゼキエル書 (断片)

Jerusalem, Monastery of St. Mark [未登録のため無番号] 8世紀 イザヤ書 (脱落あり)

以上①～⑥の関係を図式化すると次のようになる。



Ceriani と Lagarde の二つのテキスト刊行以後に発見されたシロ・ヘクサブラの写本の集大成はなされていない。

以上①～⑥以外に次のような断片ばかりを書き連ねたように写本の性格や目的が決定しにくいものが二つある。

Br. Mus., Add. 7145 9世紀 創世記 26:26-31 [この部分は公刊された<sup>(11)</sup>], ヨシュア記 22:1-6, 箴言 2:1-12, シラク書 31:8.

Cambridge, Univ. Libr. Add. 2023 13世紀 ヨブ記・歴代志下・エレミヤ書・イザヤ書・エゼキエル書・箴言・エゼキエル書・箴言の順に1～2節ずつ記録している。

② 聖句集の中でシロ・ヘクサブラを用いたのは、ほぼヤコブ派のものに限られるとってよい。ネストリウス派の聖句集ではシロ・ヘクサブラは一度も用いられていない<sup>(12)</sup>。

Br. Mus., Add. 14485 824年

Br. Mus., Add. 14486 824年

Br. Mus., Add. 14487 824年

Br. Mus., Add. 17195 10世紀

Br. Mus., Add. 17218 10世紀

Br. Mus., Add. 12139 1000年

Mardin, Syr. Orth. Bishopric, 2/47 1569年

J. Gwynn<sup>(13)</sup>, M.H. Gottstein<sup>(14)</sup>, W. Baars<sup>(15)</sup> らは、これらの聖句集から、その他の文献によつては未知であった部分のテキストを公刊した。その中にはライデンで行われているベシッタ・プロジェクトに伴って明らかになったものもある<sup>(16)</sup>。

③ ベシッタ訳の写本にはシロ・ヘクサブラと結びついたり混合したり、又欄外注にシロ・ヘクサブラからの引用を持ったものがある。結合・混合は②のベシッタ・プロジェクトで明らかになるであろう。シロ・ヘクサブラの欄外注を持ったものには、詩篇のものが多い。

Florence, Med. Laur. Libr., Or. 58 9世紀

London, Br. Mus., Add. 17109 873/4年

Cambridge, Univ. Libr., Oo. 1.1,2 12世紀

London, Br. Mus., Add. 26252 15世紀

London, Lambeth Palace Libr., 1200 1483年

Paris, Nat. Libr., Syr. 13 15～16世紀

Paris, Nat. Libr., Syr. 16 16世紀

詩篇以外でも、例えば五書のものもある。

London, Br. Mus., Add. 7146 13世紀

London, Br. Mus., Add. 7147 17世紀

いわゆる「マソラ」(ヘブライ語テキストのマソラと類似したものがシリア語にもあり、同じ名称で表わす)写本の欄外注にもシロ・ヘクサブラを伝えるものがある。

Br. Mus., Add. 12138 899年

Br. Mus., Add. 12178 10世紀

Br. Mus., Add. 17162 11世紀

Br. Mus., Add. 14684 12世紀

Lund, Univ. Libr., n°? 1204/5年

これら欄外注に示されたシロ・ヘクサブラシ伝承はほとんど研究されていない。

④ カテナには次のようなものがある。

London, Br. Mus., Add. 12168 9世紀<sup>(17)</sup>

この写本によって、歴代志上下・第1エズラ書・ネヘミヤ記の一部が知られるようになった<sup>(18)</sup>。

⑤ 聖書注解等の著作中にも当然引用がある。その際にシロ・ヘクサブラを用いた作家には、バル・ヘブライオス<sup>(19)</sup>、メルブのイショダード Ischo'dad von Merw (9世紀)<sup>(20)</sup>、テオドロス・バル・コーニー Theodoros Bar Koni (8世紀後半)<sup>(21)</sup>、イシヨ・バル・ヌーン Isho Bar Nun<sup>(22)</sup>、ディオニシオス・バル・サリービー Dionysios Bar Šalibi (†1171)<sup>(23)</sup>等が挙げられる。著作としては、サブリーシヨ・バル・パウロス Sabrisho' Bar Paulos によるとされる匿名の聖書注解<sup>(24)</sup>、聖句集の注解書 Gannat Bussame<sup>(25)</sup>が挙げられる。

⑥ 「マソラ」写本の末尾に「シロ・ヘクサブラとエデッサのヤコブの翻訳」という短いマソラを持ったものがある。次の各写本の末尾に切り離されて存在する。全く未研究である。

Rome, Vat. Libr., Vat. sir. 152 979/980年

Rome, Vat. Libr., Barb. or. 118 10～11世紀

London, Br. Mus., Add. 7183 11世紀

Paris, Nat. Libr., Syr. 64 11世紀

Damascus, Syr. Orth. Patr. 7/16 1003/4年

Mosul, Church of St. Thomas, 無番号 1014年

Rome, Vat. Libr., Borg. sir. 117 [上記写本のコピー] 1868年


Woodbrooke, Selly Oak Colleges Central Libr., Ming. Syr. 339 1863年





⑦ シロ・ヘクサブラの翻訳には Hārīt ibn Sinān によるアラビア語訳(9～10世紀)がある。文体としての優雅さを考慮したようで、同一の訳語でよい場合でも別の表現法をとる場合が多いようである。一例を示せば次の通りである<sup>(26)</sup>。

民数記 24:3, 15, 20, 21, 23.

LXX: ἀνέλαβες (τῶν) παραβολῶν



Syrohexapla: 

Arabs: (23)  (3)  (20, 15)  (21)  (23)

このような翻訳スタイルの為、研究上はあまり重要なものではないといえる。

### 注

- (1) 以下の叙述は、主に W. Baars, *New Syrohexaplaric Texts*, Leiden 1968 の Introduction §1. The Syro-Hexapla and the History of its Investigation によって整理分類したものである。各写本の内容については、この Introduction 中に示されているので、原則として本稿では省略した。しかし、彼が Additional Note として、彼の著作当時まで我々になお知られていないシロ・ヘクサブラの未発見部分を整理して提示した箇所は、幾分かは、Arthur Vööbus, *The Pentateuch in the Version of the Syro-Hexapla. A Facsimile-Edition of a Midyat Ms Discovered in 1964*, Louvain 1975 (C.S.C.O. Subsidia 45) によって埋められた（筆者未見の為、その箇所については不明。しかし、この事実は、TRE Bd. 5 (1980) S. 187 によって知られる）ので必ずしも最新の情報とはいえないが、参考の為に示しておく。

### <外典>

- Gn. 1: 20~4: 8 (πεδιω[); 9: 24 (]οσα[)~14: 24; 16: 1~2 (εδου[); 16: 12 (]επ αυτου[)~18: 33; 19: 15~20: 1 (παρωκησεν[); 20: 12 (]εις γυναικα[)~24: 9; 24: 29~26: 25; 26: 32~27: 6; 27: 20~29; 27: 41~28: 9; 29: 1~31: 53 (ανα μεσου[); 32: 22(23)~23(24); 33: 1~36: 2 (θυγατερων[); 40: 18~43: 1 (λιμος[); 47: 16 (]τα κτηνη[)~48: 22; 49: 28 (]και ταυτα[)~50: 17 (ουτως[).
- Lv. 1: 1~7: 28(38); 8: 3 (]της σκηνης[)~19: 10; 19: 19 (]τα κτηνη[)~23: 32; 23: 41 (]εν τω μηνι[)~26: 41; 26: 46 (]εν τω ορει[)~27: 34 [fin].
- Nm. 1: 1~33 (τριακοντα[); 2: 2 (]εχομενος[)~15 (χιλιαδες[); 3: 9 (]δεδομενοι[)~22 (επανω[); 3: 47 (]το δεδραχμον[)~7: 19 (σεμιδαλως[); 7: 36 (]Σαλαμην[)~10: 6 (σημασιαν 3°[); 15: 29 (]εν υιοις[)~31; 16: 1~2 (ανδρες[); 16: 29 (]παντων 1°[)~40 (17: 6); 26: 44(40)~36: 13 [fin].
- Dt. 1: 1~14: 28(29); 15: 9~16: 17; 17: 8~24: 9; 25: 1~31: 30; 32: 44~34: 12 [fin].
- Jos. 1: 11 (]του λαου[)~2: 1 (Ιερειχω[); 2: 11 (]ετι[)~3: 16 (Δαμν[); 6: 21~26 (Ιησους 1°[); 7: 10~14 (κατ 2°[); 10: 2 (]αυτης[)~11 (Αζηκα[).
- Jud. 1: 22 (]ταυτης[)~32
- 1 K. (1 Sm.) 1: 1~28; 2: 11; 2: 18~21; 2: 24 (]οτι 1°[)~7: 4; 7: 13~16: 12; 16: 18 (]και εφηλατο[)~20: 10; 20: 24~27 (Δουειδ[); 20: 34; 21: 1(2)~31: 13 [fin].
- 2 K. (2 Sm.) 1: 1~5: 25; 6: 6 (]και εξετεινεν[)~12; 6: 15~23; 7: 18~20: 26; 21: 8~23: 12; 23: 18~24: 25 [fin].
- 3 K. (1 Rg.) 7: 2(14) (]και γνωσεως[)~8: 61 (εντωλας[).
- 4 K. (2 Rg.) 25: 20 (]και απηγαγεν[)~29 (ημερας[).
- 1 Chr. 1: 5~16; 1: 18~23; 1: 29~34 (Ισαακ 1°[); 1: 35~54; 2: 18~55; 3: 21~5: 26; 6: 16 (6: 1)~30(15); 6: 50(35)~23: 13; 23: 18~29: 30 [fin].
- 2 Chr. 1: 1~15: 7; 15: 16~17: 2; 17: 4~6; 17: 10~18: 30; 18: 32~34; 19: 4~24: 6 (Ιερουσαλημ[); 24: 11 (]και συνηγαγον[)~25: 4; 25: 4; 25: 12 (]και εφερον[)~26: 15; 26: 21 (]και εν οικω[)~29: 29; 30: 6~12; 30: 21~32: 1; 32: 5~32; 33: 17~35: 19; 35: 26~36: 10; 36: 14~23 [fin].
- Esr. 1: 1~10: 44 [ffn].
- Neh. 11 (1): 4 (]και ημην[)~11; 12 (2): 9~14: 6 (13: 38); 14: 10 (4: 4)~15 (4: 9); 14: 23 (4: 17)~16 (6): 14; 16 (6): 17~17 (7): 73; 19 (9): 4~23 (13): 31 [fin].

Est. 1:1~F:11 (11:1) [fin].

<外典>

Jdth. 1:1~16:25(30) [fin].

Sir. 51:1-5; 12-30 [fin].

マカベア書がシロ・ヘクサブラに含まれていたか、また、含まれていたとすればどの程度含まれていたかは不明。なお、本文では外典の伝承については言及しなかった。それについては、W. Baars, op. cit. S. 14-16 参照。

- (2) 彼の著作には、アントワープ・ポリグロット Antwerp Polyglot (あるいは Biblia Regia 1569 年) 中に収録されている Syroum Peculium というシリア語辞典、死後に公刊された Josuae imperatoris historia illustrata atque explicata (Antwerpen 1574) や Critici Sacri (Amsterdam 1698 ff.) の中でようやく公刊された申命記 17-34 章についての研究等がある。
- (3) P. de Lagarde, Bibliothecae Syriacae, Göttingen 1892. この版には数箇所誤りがあることがわかっている。vgl. W. Baars, op. cit., S. 3, Anm. 5.
- (4) J. J. Björnstal, G.-B. de Rossi, G. B. Branca, J. Eichhorn らは、この写本に注目した。その後図書館の許可なく、写本のコピー (誤り多し) に基づいて M. Norberg, Codex syriaco-hexaplaris ambrosianus-mediolanensis, Lund 1787 が出版された (エレミヤ書・エゼキエル書のみ)。次に、現在も典拠 (Göttingen-LXX) とし得る程に注意深いダニエル書の刊本が現われた (C. Bugati, Daniel secundum editionem LXX: interpretum ex tetralis desumptam. Ex codice Syro-Esthranghelo Bibliothecae Ambrosianae, Mailand 1788). Bugati の死後、未完成の詩篇の部分を P. Cighera が公刊したが、注意深く行なわれてはいない (Psalms secundum editionem LXX, Mailand 1820). 続いて Norberg のコピーに基づいて、H. Middeldorpf, Codex Syriaco-Hexaplaris. Liber quartus Regium e codice Parisiensi. Jesaias, Duodecim Prophetiae Minores, Proverbia, Jobus, Canticum, Threni, Ecclesiastes, e codice Mediolanensi, Berlin 1835 が公刊された。その後、A. M. Ceriani は、この写本全体の再刊行の第一歩として、Baruch, Threni, et Epistola Jeremiae versionis syriacae Pauli Telensis cum notis et initio prolegomenon を Monumenta sacra et profana の第 1 巻として公刊した (Mailand 1861) が、写真版を出すことにしたので、この計画は中止された。
- (5) Codex Syro-Hexaplaris Ambrosianus photolithographice editus (Monumenta sacra et profana, Bd. VII), Mailand 1874.
- (6) J. G. Hasse, Libri IV Regum Syro-Heptaplaris specimen. E manuscripto Parisiensi..., Jena 1782. H. Middeldorpf, op. cit. P. de Lagarde は 2 回、最初は、1880 年に (後述)、次には 1892 年に (前述の Bibliothecae Syriacae) 公刊した。
- (7) S. Rørdam, Libri Judicum et Ruth secundum versionem Syriaco-Hexaplaris... ex codice Musei Britannici..., Copenhagen 1859-61. Add. 17103 の公刊。
- (8) A. M. Ceriani, Pentateuchi syro-hexaplaris quae supersunt cum notis (Monumenta sacra et profana, Bd. II), Mailand 1863. Add. 14442 と Add. 12134 の出エジプト記 33:2 までの公刊
- (9) P. de Lagarde, Veteris Testamenti ab Origine recensiti fragmenta apud Syros servata quinque. Göttingen 1880. Add. 12134 の出エジプト記 33:2 からと、Add. 14437 (両方), Add. 12133 と ③のバリ写本の公刊。
- (10) N. Pigulewskaya, Греко-сиро-арабская Рукопись IX В, in: Палестинский Сборник I (63), Moskau 1954, S. 59-90.
- (11) J. Gwynn, Remnants of the later Syriac Versions of the Bible, London 1909 中に収められている。

- (12) W. Baars, op. cit. S. 2 Anm. 2, S. 17 Anm. 4.
- (13) op. cit. S. 4.
- (14) Neue Syrohexaplafragmente, Biblica 37 (1956), 162-183.
- (15) op. cit. passim.
- (16) W. Baars, op. cit. S. 19 f.
- (17) 五書, ヨブ記, 士師記, サムエル記上・下, 列王記上・下, 歴代志上・下, 第1エズラ書, ネヘミヤ記, 箴言, 伝道の書, 詩篇, 雅歌, ソロモンの知恵, 十二預言書, エレミヤ書, エゼキエル書, ダニエル書, イザヤ書の部分のカテナを含んでいる。
- (18) C. C. Torrey, Portions of First Esdras and Nehemiah in the Syro-Hexaplar Version, AJSL 23 (1906/7), 65-74 等により知られる。
- (19) 彼の文法書 K'thabha d' Šemhē (A. Moberg (hrsg.), Le Livre des Splendeurs. La grand Grammaire de Grégoire Barhebraeus, Lund 1922) と有名な Aušar Rāzē (既出. M. Sprengling-W.C. Graham (ed.), Barhebraeus' Scholia on the Old Testament, Chicago 1931 ff.) には豊富なシロ・ヘクサブラからの引用がある。
- (20) C. van den Eynde による彼の旧約注解には, 次のようなものがある。Commentaire de Išo'dad de Merv sur l'Ancien Testament. I. Genèse (CSCO 126), Louvain 1950 (この翻訳は, CSCO 156. Louvain 1955), II. Exode-Deutéronome (CSCO 176), Louvain 1958 (この翻訳は, CSCO 179. Louvain 1958), III. Livres des Sessions (CSCO 229), Louvain 1962 (この翻訳は CSCO 230. Louvain 1963). 彼の注解書は, 同じ CSCO の続刊として, その後も刊行されていると考えられるが確認できなかった。
- (21) 彼の講解 Liber Scholiorum は, A. Scher 編で CSCO 55 (Louvain 1950), CSCO 69 (Louvain 1954) に収められている。
- (22) E. G. Clarke (hrsg.), The Selected Questions of Ishō bar Nūn on the Pentateuch (Studia Post-Biblica V), Leiden 1962.
- (23) 彼の注解は未完のままである。
- (24) T. Jansma, Investigations into the early Syrian Fathers on Genesis (Oudtestamentische Studiën XII), Leiden 1958, 69-181.
- (25) J. Vosté, Le Gannat Bussame, in: R. B. 37 (1928), 221-232, 386-419.
- (26) Field, op. cit., Prolegomena S. lxxf.; TRE Bd. 5 (1980), S. 187.

### 第3節 シロ・ヘクサブラの特徴とそのヘクサブラ研究への意義

シロ・ヘクサブラは, 第1節で述べたようにヤコブ派の単性論者達によって完成された。彼らは神学的にアンテオケア学派の伝統の中にある。そして, この伝統が彼らの聖書翻訳の際, 翻訳スタイルの決定に大きな影響を与えたと考えられる。即ち, 彼らは伝統に従い字義・文法に忠実な方法を翻訳スタイルとして撰択するのである。実際, シロ・ヘクサブラに先行するフィロクセヌス訳も元来は単性論者にとってペシッタ訳では満足できない点があったからであり<sup>(1)</sup>, 又, シロ・ヘクサブラとはほぼ同時に出来上ったハーケルのトマスの改訂シリア語新約聖書もシロ・ヘクサブラと同様にギリシア語本文に忠実な訳として知られているのだから, テラのパウルスがシロ・ヘクサブラを翻訳するにあたって選んだスタイルも, 決して彼独自の発想に由来するのではなく,

彼の内に流れるアンテオケア学派の伝統に根ざしていると考えてよいと思う。

シロ・ヘクサプラの特徴の第一は、その翻訳方法にある<sup>(2)</sup>。例をあげて示してみよう<sup>(3)</sup>。

1) パウルの翻訳のスタイルは、オリジナルのギリシア語本文に厳密に合致させようとするものであった。それは、通常のシリア語法を逸脱し、否定する程までに至った場合もある。

ダニエル書 3:15

LXX:  $\epsilon\lambda\acute{\iota}\chi\epsilon\tau\epsilon\ \acute{\epsilon}\tau\omicron\iota\mu\omega\varsigma$ .

Syrohexapla: ܠܚܝܬܝܢ ܠܚܝܬܝܢ ܠܚܝܬܝܢ

Syriacum: ܠܚܝܬܝܢ ܠܚܝܬܝܢ ܠܚܝܬܝܢ

2) 一般的な語彙は同一のシリア語で常に翻訳される。

$\theta\upsilon\mu\acute{o}\varsigma$  = ܠܡܥܝܢ

$\delta\omicron\rho\gamma\acute{\eta}$  = ܠܡܥܝܢܐ

$\lambda\acute{\epsilon}\gamma\epsilon\iota$ ,  $\epsilon\lambda\acute{\iota}\pi\epsilon$  = ܠܡܥܝܢܐ, ܠܡܥܝܢܐ

$\acute{\epsilon}\lambda\acute{\alpha}\tau\eta\varsigma$  = ܠܡܥܝܢܐ

$\eta\lambda\theta\epsilon$ ,  $\pi\alpha\omicron\omicron\epsilon\gamma\acute{\epsilon}\nu\epsilon\tau\omicron$  = ܠܡܥܝܢܐ

$\acute{\epsilon}\pi\omicron\omicron\epsilon\upsilon\eta$ ,  $\acute{\alpha}\pi\eta\lambda\theta\epsilon$  = ܠܡܥܝܢܐ

$\eta\gamma\epsilon$  = ܠܡܥܝܢܐ ܠܡܥܝܢܐ

$\acute{\epsilon}\gamma\acute{\epsilon}\nu\epsilon\tau\omicron$  = ܠܡܥܝܢܐ

3) 比較的まれな語彙は、別表現を取ることもある。

$\beta\rho\acute{o}\chi\omicron\varsigma$  = ܠܡܥܝܢܐ (箴言 7:21), ܠܡܥܝܢܐ (箴言 6:5), ܠܡܥܝܢܐ (箴言 22:25).

$\kappa\alpha\tau\acute{\alpha}\delta\upsilon\sigma\iota\varsigma$  = ܠܡܥܝܢܐ (詩篇 16:14), ܠܡܥܝܢܐ (詩篇 38:6), ܠܡܥܝܢܐ (詩篇 48:2), ܠܡܥܝܢܐ (詩篇 88:48).

$\sigma\acute{\kappa}\upsilon\phi\omicron\varsigma$  = ܠܡܥܝܢܐ (創世記 44:2), ܠܡܥܝܢܐ (出エジプト記 25:32), ܠܡܥܝܢܐ (エレミヤ書 35:5).

4) ギリシア語の持つ豊かな語彙の故に、ギリシア語とシリア語の一対一対応が出来ず、一つのシリア語で複数のギリシア語をカバーせざるを得なかった場合もある。

ܠܡܥܝܢܐ =  $\kappa\alpha\kappa\acute{o}\varsigma$ ,  $\pi\omicron\upsilon\eta\rho\acute{o}\varsigma$ .

ܠܡܥܝܢܐ =  $\acute{\alpha}\nu\acute{\epsilon}\sigma\tau\omicron\omicron\epsilon\psi\epsilon$ ,  $\acute{\alpha}\pi\acute{\epsilon}\sigma\tau\omicron\omicron\epsilon\psi\epsilon$ ,  $\acute{\epsilon}\pi\acute{\epsilon}\sigma\tau\omicron\omicron\epsilon\psi\epsilon$ ,  $\kappa\alpha\tau\acute{\epsilon}\sigma\tau\omicron\omicron\epsilon\psi\epsilon$ ,  $\upsilon\pi\acute{\epsilon}\sigma\tau\omicron\omicron\epsilon\psi\epsilon$ .

ܠܡܥܝܢܐ =  $\acute{\epsilon}\nu\epsilon\pi\upsilon\omicron\omicron\iota\varsigma$ ,  $\acute{\epsilon}\nu\acute{\epsilon}\pi\omicron\omicron\eta\varsigma$ .

ܠܡܥܝܢܐ ܠܡܥܝܢܐ =  $\zeta\eta\tau\epsilon\acute{\iota}\tau\epsilon$ ,  $\theta\acute{\epsilon}\lambda\epsilon\tau\epsilon$  (マラキ書 3:1).

ܠܡܥܝܢܐ =  $\delta\iota\epsilon\acute{\xi}\acute{\alpha}\gamma\epsilon\tau\alpha\iota$ ,  $\acute{\epsilon}\xi\epsilon\lambda\epsilon\upsilon\sigma\epsilon\tau\alpha\iota$  (ハバクク書 1:4).

ܠܡܥܝܢܐ =  $\acute{\epsilon}\kappa$ ,  $\acute{\alpha}\pi\acute{o}$ .

ܠܡܥܝܢܐ =  $\sigma\acute{\upsilon}\nu$ ,  $\mu\epsilon\tau\acute{\alpha}$ .

ⲗⲁⲗ = πρὸς, παρά.

このような翻訳上の特徴は、ヘクサブラ研究にとってどのような意味をもっているのだろうか。それは、そのシリア語から逆に元のギリシア語本文が推定される可能性が極めて高いという事に他ならない。この原文こそオリゲネスがヘクサブラ第5欄に配置したセプトゥアギンタのオリゲネス校訂本文である。しかし、この校訂本文は、ヘクサブラそのものが失われてしまい、かつ、第5欄だけを抜き書きした写本も、オリゲネスの付したアリストタルコスの記号を伝えるものは稀であって、僅かに写本 G (Colberto-Sarravianus 写本, 4~5 世紀) と写本 88 (Rome, Chigi 3, 11世紀) の二写本にすぎない。そこで、シロ・ヘクサブラの存在が大きく立ち現われて来る。また、特にダニエル書の部分では、この部分のセプトゥアギンタ本文が、かなり早い時期にテオドティオン訳によって駆逐されてしまい、セプトゥアギンタの本文は、ギリシア語では、先の写本 88 と 3 世紀のチェスター・ベッティ・パピルス<sup>(4)</sup>によってのみ伝えられるにすぎないので、セプトゥアギンタ本文を伝えるシロ・ヘクサブラの存在は重要である。しかも、残存するシロヘクサブラの写本は、第2節で述べたように主要なものはほとんど 8 世紀のものであり、シロ・ヘクサブラの成立年代 613~617 年から約 1 世紀半程の時間的隔たりを数えるにすぎないので、オリジナルのシロ・ヘクサブラに近いものが伝えられているのではないかと考えてよいと思われる。

このオリジナルに対する写本の信憑性の度合は、シロ・ヘクサブラの第2の特徴である「アリストタルコスの記号 'Ἀριστάρχεια σήματα」<sup>(6)</sup> の忠実な再現という事がどの程度まで真実かという間と無関係ではありえない。この点について従来の見解は、「正確に保たれ scrupulously retained」<sup>(6)</sup> ているとするものである。しかし、この問題について、C. T. Fritsch は、シロ・ヘクサブラはアリストタルコスの記号を必ずしも忠実に再現しているわけではない事を実証しようとした<sup>(7)</sup>。彼は、箴言中の同一節重複聖句 76 について、ヘブライ語本文(英訳で引用)、セプトゥアギンタ本文、シロ・ヘクサブラ本文(言葉そのものは引用せず)を比較検討した。例えば次のようにして [SH=Syrohexapla, OG=Original Greek (LXX)].

<箴言 2:2b>

MT: חטא לבך לתבונה

LXX: a καὶ παραβαλεῖς καρδίαν σου εἰς σύνεσιν,

b παραβαλεῖς δὲ αὐτήν ἐπὶ νοουθέτησιν τῷ υἱῷ σου.

SH: a と b を伝えているが、a はヘブライ語本文に近くヘクサブラ伝承、b はオベロスを持っており OG 伝承である。よって正しく記号が付されていると考える。

<箴言 30:15b>

MT: שלוש הנה לא תשבונה

LXX: καὶ αἱ τρεῖς αὐταὶ οὐκ ἐνεπέμψασαν αὐτήν.

ʾΑΣΘ: τρία δὲ ἔστιν ἃ οὐ πλησθήσεται.

SH: a (=LXX) と b (=’AΣΘ) を伝えており, b にはオペロスが付いている。b は確かにヘブライ語本文に近いが, それは LXX ではなく ’AΣΘ (アキュラス・ジュンマコス・テオドティオン訳) の訳である。それゆえ, b にアステリスクが付されるか, a にオペロスが付されるべきである。

このようにして, 25例で記号が正しく伝承されており, 45例では無記号であり, その他では記号が不正確に伝承されている事等を示し, シロ・ヘクサブラが必ずしもアリストタルコスの記号を忠実に伝えてはいない事, また, 記号を用いる上での先のような誤謬は, オリゲネスとテラのパウルスとの間に存在する四百余年という年月の間に忍び込んだか, あるいはテラのパウルス以後の伝承過程で生じたのであろうという見解を結論として下している。シロ・ヘクサブラ写本におけるアリストタルコスの記号および欄外注の省略は, 写本によりかなり違っており多様である<sup>(8)</sup>ので, この Fritsch の説をそのまま受け入れる事はできないとしても, 少なくとも従来のように何らの疑念も持つことなくシロ・ヘクサブラがアリストタルコスの記号を忠実に再現しているとは言えないのである。

ところでシロ・ヘクサブラの第3の特徴として, ヘクサブラ第5欄以外のギリシア語訳(「三訳等のシリア語訳を欄外注として持つ」という事がある。しかし, 先に Fritsch の挙げた例として<箴言 30:15b>を示した時, ’AΣΘ〔三訳〕は欄外注の形ではなく本文の中に組み込まれていた。これは伝承過程で誤って本文の中に入って来たものなのだろうか。それともオリゲネス自身がそのようなテキストを作ったのだろうか。ここに我々は, 先のアリストタルコスの記号の伝承の問題と相俟って, オリゲネス校訂本文とシロ・ヘクサブラの関係についての基本問題に到達するのである<sup>(9)</sup>。そこで先の Fritsch の論文に戻ろう。彼が区分した三つのグループ中, アリストタルコスの記号が正しく付加されているものの内, その片方はオペロスが付されており OG であるが, もう片方は, ヘクサブラ伝承で, 常にヘブライ語本文に近く, その起源を ’AΣΘ, Quinta, Sexta, (Septima) にもっている。例えば,

<箴言 16:17b>

MT: שֹׁמֵר נֶפֶשׁוֹ נֹצַר דְּרָכָיו

LXX: a ὁς φυλάσσει τὰς ἐαυτοῦ ὁδοὺς τηρεῖ τὴν ἐαυτοῦ ψυχὴν.

b ἀγαπῶν δὲ ζωὴν αὐτοῦ φείσεται στόματος αὐτοῦ.

Θ: τηρεῖ ψυχὴν αὐτοῦ φυλάσσωσιν ὁδοὺς αὐτοῦ.

SH: b はオペロスを持っており OG である。a はヘブライ語に近くヘクサブラ伝承であるが, これは明らかにテオドティオン訳から来ている。

<箴言 25:23b>

MT: הִכָּר と言葉。

LXX: a ἐπιγνώσκειν

b αὐδεῖσθα:

'ΑΣΘ: ἐπεγνώσκεν

SH: b はオペロスをもっており OG である。a はよりヘブライ語に近く、ヘクサブラ伝承であるが、これは 'ΑΣΘ と同じである。

このような現象から、オリゲネスのセプトゥアギンタ校訂作業がどのようなものであったかを垣間見ることができる。即ち、シロ・ヘクサブラは、オリゲネスが校訂本文作成作業に於てかなり厳密にそれを行ったのではないかという事を知らしめるのである。更に、三訳そのものの研究にとっても、シロ・ヘラサブリクは、欄外注のみならず、本文中にも注意を向ける必要もある事を教えてくれるのである。

従って、オリゲネス校訂本文がどのようなものであったかについて知る為には、シロ・ヘクサブラの伝承とシロ・ヘクサブラ以外の伝承との比較が必要であろう。ところが、ヘクサブラそのものが元来他のギリシア訳との比較の中でセプトゥアギンタ本文を示そうとしたのであるから、オリゲネス校訂本文そのものがすでに他のギリシア訳との緊張関係の上に成立しているのである。そこで三訳等の重要な典拠であるシロ・ヘクサブラは二重の意味でヘクサブラ研究にとって欠くべからざる存在である。オリゲネスとテラのパウルの間の四百余年の間にどの程度の伝承上の変更があったかは定かではない。しかし、三訳等をも含んだ伝承がテラのパウルの前にあった事は間違いない。セプトゥアギンタそのものだけの伝承ならともかく三訳等をも含んだ伝承という事になると、量の上からそれ程しばしば書き写されたとは考えにくいので、それ程オリジナルのヘクサブラから遠くはないであろう。またパウルの翻訳方法から考えて伝承に彼が変更を加えたとは考えがたい。それ故、シロ・ヘクサブラはかなりオリジナルに近いものを伝承していると考えてよいであろう。こういうわけでシロ・ヘクサブラはヘクサブラ研究にとって極めて重要であると結論できる。

#### 注

- (1) S. Jellicoe, *The Septuagint and Modern Study*, Oxford 1968, S. 125.
- (2) これについての最良の文献は、今なお次のものである。S. Rørdam, *Dissertatio de regulis grammaticis quas secutus est Paulus Tellensis in veteri testamento ex graeco syriace vertendo*, in: op. cit., S. 1-59.
- (3) F. Field, op. cit., *Prolegomena*, S. lxixf. による。
- (4) F.G. Kenyon (hrsg), *The Chester Beatty Biblical Papyri*, Fasc. VII: *Ezekiel, Daniel, Ester*, London 1937. このパピルスに伝えられるダニエル書の部分は完全であるわけではなく脱落部分がある。vgl. W. Baars, op. cit., S. 6, Anm. 6.
- (5) アリストタルコスの記号は、それが用いられる文献の性格等によって多様な適用がなされているようである。そのような多様性と共にヘクサブラ第5欄におけるオリゲネスの記号の実際の適用の仕方について詳しいのは、F. Field, op. cit., *Prolegomena*, S. lii 以下 である。

- (6) H. B. Swete-R. R. Ottley, *An Introduction to the Old Testament in Greek*, Cambridge 1914, S. 112.
- (7) *The Treatment of the Hexaplaric Signs in the Syro-Hexaplar of Proverbs*, JBL 72 (1953), 169-181.
- (8) TRE Bd. 5 (1980), S. 187.
- (9) P. E. Kahle, *The Cairo Geniza*, Oxford 1959<sup>2</sup> は、261頁で次のように言っている。  
 „It is very probable that in the Sahidic version of the Minor Prophets we have evidence for the Septuagint text of Origen which was translated either within Origen's lifetime or at any rate very soon after his death, and which as early as the fourth century is supported by MS evidence [...], evidence almost 400 years older than the Syro-Hexaplaric version translated by Paul of Tella in the years 616 to 617, which up to now has been accepted as the main source for the Septuagint of Origen.” D. Barthélemy, *Les Devanciers d'Aquila*, Leiden 1963 も、228-38頁 (*Relations avec les anciennes versions coptes*) の中で1952年に発見された十二預言書の写本とコプト語訳の関係を論じている。これらはオリゲネス校訂本文そのものを論じる場合には必ず言及せねばならない。しかし、本稿では、そのような問題が存在することを指摘するに留める。



## Die Syrohexapla und ihre Bedeutung zur Hexaplastudien

## — Hexaplastudien 2 —

Toshiyuki Iro

Die Syrohexapla ist die syrische Übersetzung der 5. Kolumne der Hexapla, die das monumentale Werk des Origenes zum Text des griechischen Alten Testaments ist. Sie ist dafür berühmt, dass sie den Text [Origenische Rezension der Septuaginta] sehr wörtlich übersetzt, dass sie den aristarchischen Zeichen aus dem Original übernimmt, und dass sie oft am Rande auch syrische Übersetzungen anderer Kolumnen der Hexapla hat. Dieser Aufsatz handelt von den drei Eigentümlichkeiten des Syrohexapla und ihrer Bedeutung zur Hexaplastudien.

Dieser Aufsatz besteht aus den drei Abschnitten. Der erste Abschnitt schildert die Entstehungsgeschichte der Syrohexapla. Aus dem Bericht der syrischen Kirchenväter und den Kolophonen der erhaltenen Handschriften können wir die Übersetzer, den Entstehungszeit, den Entstehungsort usw. feststellen.

Der zweite Abschnitt schildert die Überlieferung und Veröffentlichungen der Syrohexapla. Die Überlieferung des Syrohexapla werde in den drei folgenden Klassen eingeteilt. Erste Klasse ist direkte Überlieferung, die das Syrohexaplatext selbst überliefert. Zweite Klasse ist indirekte Überlieferung, die das Syrohexaplatext als Zitat überliefert. Und dritte Klasse ist die Übersetzung des Syrohexaplatexts. Der Verfasser hat die Überlieferungsmaterien des Syrohexapla in diese drei Klassen eingeteilt, und hat ihre Veröffentlichungen (Textssammlungen, Faksimiledrucke, Zeitschriftenveröffentlichungen usw.) dargestellt.

Der dritte Abschnitt schildert die drei obene Eigentümlichkeiten der Syrohexapla und ihre Bedeutung zur Hexaplastudien. Was die Überlieferung der aristarchischen Zeichen und Randlesarten betrifft, so weisen die verschiedenen Handschriften Unterschiede auf. Trotz allem sei die Syrohexapla nicht nur die Hauptquelle der 5. Kolumne der Hexapla, sondern ist auch die anderer griechischen Übersetzungen der Hexapla.